

異文化間のコミュニケーションと日本人の意識

柳 内 忠 剛

はじめに

我が国においては近年とみに国際化の必要性とか国際人の養成とかが各方面で叫ばれ、また我が国は国際的に誤解されているとか、文化摩擦とかいうことが一般の話題にもなるようになってきた。そしてそのような話題を論ずる際に、しばしば日本と外国、あるいは日本人と外国人の間のコミュニケーションが問題点のひとつとして言及される。

そこで本稿では異文化間のコミュニケーション、特に日本文化に帰属する我々日本人と日本文化に属さない日本人ではない人々とがコミュニケーションしようとするとき、どのようなことが問題として生じ、それらを解決するには、またはより好ましくは、そのような問題が生じないようにするためには、我々にはどのようなことが必要であるかを考察し、その際大方の日本人の閉ざされた意識を解放することが何よりも大切であることを指摘する。

I 人間のコミュニケーションの特徴

言うまでもなくコミュニケーションという語はもともとは英語である¹⁾。それでは英語ではこの語は果たしてどういう意味かといえば、たとえばOEDでは「概念(アイデア)、知識、情報等を(話しことば、か書きことば、か記号(signs)により)与えること、伝達すること、または交換すること」と

定義されている²⁾。またアメリカの辞書であるウェブスターのニュー・インタナショナル・ディクショナリーの第三版では「思考または意見の交換：個人間において意味が（言語、記号（signs）、または身振りのような）共通の記号（symbols）体系によって交換される課程」と定義されている³⁾。いずれにせよことば、またはその代換え・補足手段としての記号や身振りによって概念、思考、知識、意見、情報等を伝達したり交換したりすることのようである。しかし果たしてこのようなことが多くの日本人がコミュニケーションなることばで意味する内容であろうか。「伝達したり交換したりすること」の部分には異存はないであろうが、その対象、すなわち「概念、思考、知識、意見、情報等」の部分についてはどうだろうか。多くの人はこの部分にまっさきに「気持ち」とか「感情」とかのことばをおきたいと感ずるのではないだろうか。このような予測をもって今度は日本語の辞書にあたってみると、果たしてそこには「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介する」とある⁴⁾。もちろん我が国の辞典でも「日本国語大辞典」のように「感情」のような情緒を表わす語をひとことも用いないで定義している辞典もある。しかし情緒を表わすことばが用いられているであろうという予想が、たとえ一辞典においてではあっても、正しかったということは、日本人のコミュニケーションにおいては「感情」とか「気持ち」とかの情緒が、より理性的な「思考」とか「意見」と少くとも同程度に、恐らくはこれら以上に、重視されることの反映と考えてよいであろう。もちろん英米においても情緒的なものは伝達・交換の対象にならないと考えられているのではないだろうが、そのようなものは上の OED の定義であれば「等」のところに入ってくるぐらいであり、コミュニケーションというときにはまっさきにより理性的なものの伝達・交換のことを考えるということである。

コミュニケーションにおけるこのような、いわば理性重視の姿勢と感性重視の姿勢の差は単に英米と日本だけの間の差ではなく、ほとんど他のすべての社会・文化と日本の社会・文化との間の差異として存在するようである⁵⁾。もしそうであるならば、すでにこの点に日本人と外国人とのコミュニケーション

ョンの問題点の一端をうかがい知ることができるのである。しかしこの点については第三節で詳しく論ずることにして、今は人間のコミュニケーションについてもう少し考察しておこう。

人間がコミュニケーションする際にその手段として最も大切なものは言語である。言語以外の手段としては記号や身振りなどが考えられるが、これらはいずれも、何らかの理由で、言語を手段として用いることができないときや言語に附随して用いられるものである。筆者は人間のコミュニケーションには言語によらないもの一つつまりノンバーバルコミュニケーションがあることは十分承知しており、それはまたコミュニケーション研究の重要な一部分をなすことにも賛同するものであるが、それでもなお言語の使用が人間のコミュニケーションにおいては基本であるとする。このことはこの拙論のどの一ページでもよいが、そのページの内容を言語を使わないで他の人に伝達しようと試してみればすぐに明らかであろう。すると重要なことは、この言語をどのように駆使してコミュニケーションをより効果的にするかということになる。そして日本人のコミュニケーションの手段としての言語の使用には、はなはだ不十分、不適切なところがあるというのが筆者の考えであるが、この点についても後に第三節で詳しく触れることになる。

II 文化とは何か

他の多くのことば同様「文化」ということばにはいろいろな意味と使い方がある。その多様な意味と用法を有する「文化」ということばを、本稿では鈴木に従って⁶⁾、ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式の固有の型（構図）のこととして使用する。このように捉えられた文化には、その成員の行動を通常無意識のうちに規制するという重大な特徴がある。つまり、人間の行動には、自己の文化ではあたりまえであって、従って通常はことさらなぜそうするのか考えてもみないような行動があり、それらは異質の文化⁷⁾と対比してみたときはじめて鮮明にみえてくる種類のものである。このように文化というものは、

ホールのことばを借りると、「あらわにするよりはより多く隠すものであり、しかもその隠すものをばその成員から最も効果的に隠す」のである⁸⁾。このことは異文化間のコミュニケーションにはきわめて重大なかかわりをもつと思われるが、この点については次節で詳しく論ずる。

ところで、人間の言語にも上のような文化の定義及びその特徴はよくあてはまり、言語はある人間集団に特有のものであり、祖先から子孫へと学習により伝承されていくものであり、固有の型をもつものである。我々の母国語での言語行動はまた改まってなぜそうする（言う）のかを考えることなしに行われる部分がかなりある。このように言語は文化の一部であり、言語以外の文化とはきわめて緊密なかかわりをもつ、重要な一部なのである⁹⁾。そして言語も言語以外の文化も人間集団が違えば異なりうるものであり、もちろん種としての人類はひとつであるから共通性も多いが、実際に驚ろくほど多様な様相を呈するものなのである。

III 異文化間のコミュニケーションと日本人の意識構造

多くの人は異文化間のコミュニケーションの問題というときすぐのことば、それも日本人の場合は外国語、の問題と考えるであろう。たしかに、すでに第一節でみたように、人間のコミュニケーションの基本的な手段は言語、つまり、ことばであるから、ことばは重要である。人間がコミュニケーションしようとするとき、何よりもまずお互に通ずる言語が必要である。そして文化が違うということは、通常言語も異なっていることを意味するから、異文化間のコミュニケーションでは、お互に通ずる言語というのは、当事者の少くとも一方にとっては外国語であり、しばしばその双方にとって外国語であることもある。またそのようなお互に通ずる言語が当事者間に見い出せないときには、通訳に頼らざるを得なくなる。日本人が異文化に属する人とコミュニケーションしようとするとき、使用言語が日本語である場合よりは外国語である場合の方が多であろう。するとここにまず問題が生じてくる。というのは、一般に日本人は外国語の能力、とりわけコミュニケーションの手段

としての外国語の運用能力、が劣ると日本人自身が認め、また事実その通りであるらしいからである¹⁰⁾。

しかし、異文化間でのコミュニケーションではことばさえ通ずれば全てうまくいくというものではなく、ことば以外の要素がきわめて重要なのである。日本人が他の国民より外国人とのコミュニケーションに困るというのは、外国語の知識の貧しさだけでは説明できないのである。外国語の知識が十分でないから外国人とうまくコミュニケーションできないという考えの背後には、ある言語の文法的な文を産み出す能力（シンタクス、語彙、発音、文字の十分な知識を総合した広い意味でのその言語の文法の能力—チョムスキー(1965)の言う言語能力)さえあればその言語で自由にコミュニケーションできるはずだという考えが潜んでいる。しかしながら、これは人間のコミュニケーションをその手段である言語の面からだけ考えたみかたであり、その文化的側面への配慮を欠いたみかたである。コミュニケーション、とりわけ異文化間コミュニケーションにおいては、そのような文法的能力だけでは不十分で¹¹⁾、その能力の実際の場面での運用能力、いわば文法外のコミュニケーション能力が、文法的能力に劣らず重要であるということである¹²⁾。このように、言語には文法の規則のほかにその言語を用いる社会の言語文化特有のいわばコミュニケーションの規則（文法の規則同様暗黙のものである）があり、それは当然のことながら言語文化が違えば異なりうるというものなのである。そして日本の言語文化におけるコミュニケーションの規則は、すでに第一節で少し触れるところがあったように、他の言語文化、とりわけ欧米の言語文化のコミュニケーションの規則とはきわだって違っているところがあるのである。ところが人間というものは、たとえ外国語を用いてコミュニケーションするときでも、往々にして自己の文化のコミュニケーションの規則に無意識のうちに従ってしまうものなのである。ここに異文化間コミュニケーション最大の問題点があることになり、また多くの誤解の原因ともなるのである。

ともすれば我々は、少くとも母国語では、言いたいことを言いたいときに自由に言うことができると思いがちであるが、これは言論の自由が保証され

ていない社会はもちろんのこと、言論の自由が保証されている社会であっても、制約を伴っているのである。つまりどの社会であってもいい放題には制約があるのである¹³⁾。そしてこの制約は人間社会に普遍的な部分ももちろんあるけれども、社会が違えば違いうる部分もある。逆に言えば、この制約をうけない部分、すなわち特定の場面で言ってもよいこと、またどんなことが言うに価すと考えられるかということも、社会によって違っているということである。具体的な例で言えば、たとえば初対面の女性にいきなりその年齢をきくというようなことは、このごろでは我が国においても、欧米の文化の影響で、はばかれる面もあるようであるが、欧米の文化では、医者でもない限りは、してはいけないこととされるのである¹⁴⁾。

グライスに会話を支配している一般的条件を考察した有名な論文があり、彼はその中で「協調の原理」というものを提唱している¹⁵⁾。この原理そのものは基本的にはすべての言語社会にあてはまる妥当なものであると思うが、その細部を構成するマキシム (maxim) 及びサブマキシム (sub-maxim)¹⁶⁾ になると必ずしもその通りあてはまらない言語社会が出てきそうである。たとえば、日本社会、日本文化においてはそれぞれのマキシム違反が欧米文化におけるよりも頻繁に起こりそうだという気がする。今「十分な根拠のないことを言うな」というマキシムを例にとれば、十分な根拠に基づかない、憶測や思い込みだけに頼った発言が多いのが日本人の議論の特徴であると、日本人ではない人々によりしばしば指摘されるところである¹⁷⁾。また、何を言うかではなく、どのように言うべきかに関するマキシムとしてグライスは「漠然とした表現を避けよ」、「曖昧さを避けよ」、「簡潔であれ (必要以上のことをくどくどと述べるな)」、「理路整然と述べよ」の4つのマキシムをあげているが、日本人の物の言い方には上のマキシムのいずれにもことごとく違反して、漠然とした表現で、曖昧模糊としていて、それでいて必要以上のあまり関係のないようなことをくどくどくり返したりして、何とも理路整然としないので要点は何なのかさっぱり分らないというようなものがきわめて普通にみられる。グライスのこれらのマキシムをよく考えてみると、やはりこれは英語を母国語としている人の考えたことであり、日本語を母国語とし、

日常コミュニケーションの手段として日本語を使って暮らしている人であれば、あるいは違った考えに到達したかも知れないという印象を持たざるを得ない。Ce qui n'est pas clair n'est pas français (明晰ならざるもの、フランス語に非ず) という有名な文句を吐いたのはフランスの文人、アントワーヌ・リヴェロールだそうだが、この伝でいくと Ce qui n'est pas vague n'est pas japonais (曖昧ならざるもの、日本語に非ず) とならざるを得ないようなのが多くの日本人の日本語の使用の現実であるように思われる¹⁸⁾。このような、よりよきコミュニケーションの手段としてはおおよそ適さないような言語の使用法は、日本人同士のコミュニケーションには最適なものであるはずであり(もしそうでなければ、そのような言語の使用はすでに改められているはずであるから)、そうすると、日本人のコミュニケーションと日本人以外の人々のコミュニケーションとはその質において違いがあるのではないかという疑念が湧いてくる。我々は、すでに第一節において、コミュニケーションの対象に微妙な差異のあることをみた。英米に限らず日本以外のほとんどすべての社会においては、自己の思考や意見、主張等は、はっきりことばに出して伝達すべきものであって、もしそうしないと、「奥ゆかしい」などと賞讃されることは決してなく、自己の考えもことばではっきり表現できない愚鈍な奴として軽蔑されかねないが、それに反して日本では自分独自の考えや、意見、主張などを、あまりはっきりことばに出すと、かえってまずいのであり、従って、なるべくことばに頼らず伝達しようとし、どうしてもことばで表現しなければならないときは、明晰さを避け、相手の受け取り方によってどうにでも解釈できるような表現を、無意識のうちにはあるが、わざと用いるのであろう。このようなコミュニケーション形態こそまさに日本社会・日本文化の要請しているものなのである。また、日本の社会では人と人との関係がことのほか大事であり、その関係は情緒的な、きわめてウェットな関係であって、それゆえ、コミュニケーションにおいても自己及び相手の感情、気持ちが、理論的、知的なものより優先するのである。また、感情とか気持ちのような情緒は、はっきりことばで表現しなくとも、知的、論理的なものよりはるかに、態度や表情などの非言語的手段で伝達できるものな

のである。動物は通常人間のことばを話さないが、それでも人間と動物が情において通ずることができるのはこのためである。ここに、「以心伝心」とか「腹芸」とかのすぐれて日本的なコミュニケーション形態の生まれる理由がある。しかし、これに反し、日本以外では、特に欧米では、いわば言語偏重であって、何ごともことばで表現されないうちは無いことと同じなのであり、感情とか気持ちも、まずことばで表現すべきものであって、時としてことばだけでは足りなくて、大げさな（大げさとは限らないが）身振りをとまなうことがよくある。このような社会では「以心伝心」などということはおよそ成立する余地はなく、いわば、「以言伝心」ではじめて真のコミュニケーションが成り立つのである¹⁹⁾。

日本人同士のコミュニケーションには以上みたように、何ごともなるべくことばによらずに伝えようとする傾向があり、そのようにして伝えることができるものは情緒が主であるから、日本人の日常のコミュニケーション活動においては、知的、論理的なことが、ことばでやりとりされることが、他の社会と比べて格段に少ないように思われる。従って日本人は一般に、日本語でさえ論理を戦わせることがきわめて苦手なのである。鈴木孝夫は「今の日本は非常に不均衡なプロポーションをもった巨大なびっこ象のようなものである。どのように動いても、あたりの環境は大きな影響を受ける。そして歩き方、行動様式がアンバランスであるため、他の動物の予測の範囲を越え、期待はずれの動き方をする。しかもこの巨大な象はオシなのである。…日本語で、我々は自分の意志を国際的に伝えることができない。そうかといって…外国語、とりわけ国際的通用性をもつ英語で十分に自己を表現することもできない」と述べている²⁰⁾が、我々は、国際的はおろか国内的にもことばで十分に自己を表現することはできないのであり（もちろんそうしようと思えば能力的にはできる人は大ぜいいると思われるが、上で述べたように、そうすると日本人同士ではかえってまずいのである）、それでもなお、国内的には自己の意志が、曲がりなりにも、どうにか伝わっているのは日本社会の画一性と厳密な型における「以心伝心」的要素のおかげであり、そのような背景のない人々にはいっこうに伝わらないのは道理である。このようにみ

てくると我々はどうしてもこの日本文化・日本社会における個人の存在様式、行動様式の特異性に注目せざるを得なくなる。なぜなら、それこそが我々日本人と外部世界との接触・交渉において出てくるいろいろな問題の根本的原因であるからである。

日本人の日本社会における存在様式・行動様式の特異性については、すでに世に溢れていわゆる日本人論において論じ尽されている観があるが、ここではその特異性の主なものを取りあげ、それらをコミュニケーションの視点から考察してみよう。

まず、日本人を日本人以外から区別するきわだった特徴として、集団への帰属（意識）と、そこから生じる思考・行動のすべての面における恐ろしいまでの画一性ということがある。もちろん、日本人だけが集団をつくるわけではないが、日本人の集団は、他の社会の集団がそうであるように、個と個の任意の集団ではなく、個人の恣意が集団という枠の中で大幅に制限された半強制的な集団であって、集団の論理でもって個人をその論理に画一化するように強く強制するものである²¹⁾。従ってそこでは個人は独自の思考様式・行動様式をとることは大幅に制限され、みな同じように考え、同じように行動するという型にはまった画一性が顕著に現われてくる。思考・行動様式がこのように型にはまっている場合には、コミュニケーションは明晰にことばで表現しなくとも、その型というコンテキストがあるので、まあうまくいくであろうが、いったんそのような型にはまりようのない場面（異文化の人を相手にした場合がまさにそのような場合のひとつである）では、どうしたらよいか分らずコミュニケーション行動はおろか、正常な思考までも停止してしまうのである。いわゆる「外人恐怖症」がこれである。次に、日本人の特性として他律的であるということがある²²⁾。これはさきの集団の論理に従って行動する者に必然的に出てくる属性であって、これが最近よくいわれる個性のなさ招くものである。他律的であっては独自の判断、独自の考えがないのも当然である²³⁾。このこともまた日本人と外国人がコミュニケーションするときの障害となる。なぜなら、コミュニケーションとは、相手からその考えや知識、意見などを受けると同時に、こちらからも相手にそういうもの

を与えるものであり、その際こちらからは与えるべき独自の考えや意見等がないというのは、相手にとって何ら得るところのないつまらないコミュニケーションだからである²⁴⁾。

さらに、最初にあげた集団の論理に関連して、「ウチ」と「ソト」を強烈に峻別する意識があげられる。クラークは日本における人間関係（個人の存在形態と言ってもよい）はタマネギのように同心円的であるという²⁵⁾。個人は中心から外部に向って層をなす人間関係の「輪」でとり囲まれていて、もっとも内側の輪は個人のもっとも親しい間柄の人たちの輪で、外側に行くに従って徐々に疎遠な人たちとの関係の輪で、もちろん、もっとも外側の輪は日本人全体の輪であろう。さらにそのさきは、当然のことながら、十把ひとからげの外部世界しかない。この見方は日本人の意識構造を実に見事に捉えた見方である。日本人は同心円の内部の人同士では実に親密なコミュニケーション（ただし、多くはきわめて情緒的なものであるが）をもつが、ひとたび同心円の外側に位置する人と認定すると、たとえ同国人であっても、非常な異和感を持って接するのであって、ときにはその存在さえも無視するような行動に出ることもある。公共の場所等で仲間うちで大騒ぎをして、あたりをはばかることがないのはこのためである。

日本人の意識のこのようなあり方が異文化間コミュニケーションに重大な障害となることは明らかである。異文化に属する人はタマネギのいちばん外側の輪にも属さないのだから、そういう人たちは十把ひとからげに「外人」なのである。そして、集団内のことはその輪の内部の者だけがよく分るのであって、外部に位置する者は、たとえ、同国人といえども分らないのであり、まして、もっとも外側の輪にさえ入らない人に分るはずがないという意識があるのではないか。外国人に日本文化のことは分らないとか、外国人に日本語が分るはずはないという抜きがたい確信を持った日本人は多いが、そういう確信も上のような意識から生まれるのであろう。このような思い込み、先入観、悪くすると偏見というものは人間だれしも他者に対して大かれ少なかれ抱くものではあるが、普通は現実即して矯正されるのだが、日本人の場合、その思い込みや先入観が意識の深層に強く根づいていて、そのため、そ

のような先入観等に合わない現実に出会ってもなおかつ先入観に固執した行動をとることがある²⁶⁾。

鈴木（1975）のタイトルは「閉ざされた言語・日本語の世界」であるが、以上のように考えてくると閉ざされているのは、人間の言語のひとつとしての日本語ではなく、その言語を毎日使って生活している日本人の意識、または、心であるをつくづく思う。日本人のこの閉ざされた心がよりよき異文化間のコミュニケーションを防げ、また無用の誤解を生む大きな原因になっている。従って、よりよき異文化間コミュニケーションのためには、意識の解放こそが、外国語の習得や外国文化の理解にもまして、今我々日本人に求められることなのである。

む す び

以上我々は異文化間のコミュニケーション、とりわけ、日本文化と日本以外の文化の間のコミュニケーションの問題を言語の面、文化面、それから人々の意識の面から考察してきた。これらはお互いに密接なかわりを持って、特定の人間の社会・文化における言わば存在様式を規制していることが分った。従って、コミュニケーションの問題は単にことばの問題にとどまらず、社会・文化のあり方、またその中で個人はどのような意識をもって日常生活を営んでいるか、いわば個人の生活全体に深くかかわっているものであった。そして、この日本という国に何か特異な点があるとすれば、それはこの日本という社会・文化における日本人の意識構造が、他の社会、他の文化の人たちの意識構造ときわ立って特異な面があるということである。

そもそも、人間の物の考え方、価値観、行動には本来かなり広い選択の幅があるものであり、これが個人の好みのような問題になれば、その幅はより一層広いものになるはずのものである。ところが、日本の社会では皆が同じように考え、同じような価値観を持ち、同じように行動するという画一化が顕著である。このような社会では人々の言動は型にはまったものになり易く、その中で型にはまらない者は意識の上で排除されることになる²⁷⁾。我々はこ

のような自己の文化に対する客観的な認識を持ち、その上で、その閉ざされた自己の意識を人類社会の多様性、多元性に向けて解放し、情報、知識等を受けとるだけではなく、こちらからも与える真の意味でのコミュニケーションの確立に務めなければならない。

注

- 1) ここで言う「もとは」とは日本語に入る前はということであり、この語は語源的にはラテン語からフランス語を経由して英語に入ったものである。
- 2) *OED, communication* の項の 2。
- 3) *Webster's Third New International Dictionary, communication* の項の 6a。
- 4) 広辞苑 第三版コミュニケーションの項。
- 5) クラーク、グレゴリー (1977), Clark, G. (1983) 参照。このような差異はコミュニケーションに際してだけの差異ではなく、より基本的には日本と日本以外の文化における自己と他者のかかわり全般、つまり対人関係における重要な差異として認められる。
- 6) 鈴木 (1973) 「まえがき」。
- 7) 異質の文化、つまり異文化というと外国の文化しか想像しない人もいよう。しかし同一社会の中でも地域差、年齢差、男女差、階層差、そして社会によっては民族差による文化の違いはあるのである。たとえば東京文化とか関西文化というのは地域差をいい、ジェネレーションギャップは年齢差による文化の違いが大きな原因である。もちろん国内の境界を越えると普通文化の差は一段と大きくなる。このようなことを承知の上で本稿では異文化というときには外国文化のこととする。
- 8) Hall, E. T. 1973 年版, 30頁。
- 9) 言語と文化のかかわりについては鈴木 (1973) がきわめて示唆に富む。
- 10) 日本人の外国語下手はもはや世界的に定評のあるところで、このことを指摘した著作はおびただしい数にのぼる。ここではライシャワー (1977) 第37章をあげておく。
- 11) もちろん我々が外国語を習うときは、その文法だけでなく、多かれ少なかれその文化的背景や実際の場面での運用についても併せて学ぶのであるが、日本の外国語教育ではこれらの面への配慮が十分行われていないように思われる。このことが、外国語を習う側の外国語、外国文化、外国の社会に対する心理的異和感とあいまって、その外国語の運用能力がつかない大きな原因になっているのだと思われる。
- 12) この点に関してはネウストプニー (1982b) 40~85頁にくわしい。また、渡

辺(1985, 29頁)は「コミュニケーション理論では、言語能力とコミュニケーション能力を区別している。言葉のしくみ、文法の知識、語彙の数を誇っているだけでは、コミュニケーションはうまく運行されない。その言語文化のしきたりやマナーは勿論、ものたずね方、助けの求め方、ことわり方、お礼の言い方など、文化に内在する言語行動のルールを身につけることが必要となる」と述べている。

- 13) 安井(1982)参照。
- 14) 我が国のある国立大学で今年(1985年)の春、アメリカからある女性を新しい外国人教師として迎え、その歓迎会の席上で、出席者の一人のある高校英語教師が彼女に面と向って、“Are you a spinster?”ときいたという話を、その会に出席していた大学教官である友人から聞いたことがある。当の女性は一瞬何ごとが起ったのか見当もつかないようにきょとんとして、友人が「彼はあなたはまだ独身であるのかどうか尋ねているのです」と解説してやるまでとまどっている様子であったという。この話は異文化間コミュニケーションの問題を考えていた筆者に恰好の材料を提供してくれた。つまり *spinster* なる今日では日常会話においては全く使われることのない語(事実、当の女性は後日友人に *spinster* という語が使われたのを生まれてはじめて聞いたと言ったそうである)を使ったこと(上でみた文法の知識—この場合は語彙に関するものである—の不十分さ)ばかりでなく、この教師はそのようなことを初対面の人にきくものではないという、英語文化におけるコミュニケーションのルール違反を、当人は全く意識せずに、犯しているのである。異文化間のコミュニケーションではまさにこういうところが最大の難関なのである。
- 15) Grice (1975)。
- 16) 筆者は日本文の中にやたらと外国語、あるいは必要以上の片仮名の外来語を使うことは好ましくないと思うものであるが、この語の適切な訳語を思いつかないので、止むを得ずそのまま使うことにする。
- 17) たとえばクラーク(1977, 40—41頁)は「エコノミックアニマル」という語句をとりあげ、いかに日本人がこの語句の意味を曲解し、多くの場合現実にはありもしない自分たちへの非難について論じてきたか述べている。また、ある在日外国人は日本の英字新聞への投書で(*Japan Times*, June 2, 1985)日本人はいかに論理の使用に未熟であり、本当の問題をすりかえ、なされてもいない非難に対して反論(もちろん情緒的である)を試みているかを指摘している。実際 *Japan Times* の投書欄はこの種の指摘で満ち満ちている。
- 18) 筆者は決してこのような現象を日本語という言語の欠陥だと主張するつもりはない。曖昧で論理的でない等のがあたかも言語としての日本語の特徴的欠点であるかのような議論がしばしばなされるが、日本語でも、いくらでも明確で論理的な表現はできるのであり、「日本語は～である」式の欠点は全て日

本語を使う使用者の側の欠点に帰せられるべきものとする。

- 19) 日本では夫婦の間で会話のいらない状態はひとつの理想の状態と考えられるようであるが、たとえば、欧米ではそのような状態は理想どころか、離婚が間近い、きわめて危険な状態と考えられるであろう。彼らは、たとえ夫婦のような親密な間柄であっても、絶えずことばでお互いの気持ちを確認しあっていないと不安で仕方がないようである。
- 20) 鈴木 (1975) 149 頁。
- 21) 荒木 (1972) 14—15頁, Reischauer (1978年版) 230 — 31 頁参照。
- 22) クラーク (1977, 89頁) は「日本人が他のほとんどすべての国民と基本的に異なるところは、まさに内なる力よりも外なる力に敏感であること、いわば能動的・主体的ではなく、受動的・依存的であることに求められるよう。そしてこの依存性こそ、日本という特異な集団主義的社会的重要な産物なのである」と述べている。また、荒木 (前掲書) 参照。
- 23) この点に関しクラーク (前掲書70頁) は「…日本人は…群衆の中にいることに楽しみをおぼえるようであり、暗黙の約束事に従って (従って、他律的に一筆者注) 行動しているように見受けられる」「仮に欧米人に芋の子を洗うような海辺の写真をみせたとしよう。例外なく、そこへ行くのはやめる。ところが日本人の場合、他の人々が行っているなら、それだけ価値のあるところなのだと思えるのが普通である。およそ日本は、観光案内のパンフレットで観光地の人出の多さを大いに宣伝する唯一の国ではなからうか」と言っている。
- 24) よく英語を母国語とする在日外国人の意見として、来日当初は自分の母国語である英語でしきりに話しかけてくる人がいるので喜んで相手をしていたが、そのうちそういう人たちの言うことに何ら興味を引く内容はなく、ただ英語の練習相手にさせられているだけだということが分っていやになった。それでも日本人は百人が百人ともなぜああ同じ質問ばかりするんだろうというようなことが言われたり、書かれたりする。
- 25) クラーク (前掲書) 及び (1983)。
- 26) たとえば、日本の大新聞に日本語で、それもやたらとむずかしい漢字を使って、「日記」を連載していたある日本研究家は、その読者から漢字にはどんな易しいものにもですべて振り仮名をふった手紙をもらって驚いている。その読者は自分が感心して読んだぐらいの日本語を書けるぐらいの人だったら、たとえば外国人でも漢字でもすらすら読めるはずだという正常な思考が意識の根底にある先入観のために停止してしまったものであろう。また、外国人 (特に西洋人) はさしみは食べられないというような過度の一般化が先入観として心の奥深くこびりついているため (さしみが食べられない西洋人は依然として多数派だろうが、最近では世界各地の日本食ブームのせいも、好んでさしみやすしを食べる西洋人が一般の日本人が想像するより多数いることも事実である) さしみ

- が大好きだという西洋人が現われ、目の前でうまそうに食べてみせても、心の底からは信じられないで、当の西洋人を夕食に招いても、さしみを出そうなどとは思っても及ばず、無理して作った西洋料理でもてなすなどということもある。
- 27) 最近社会問題になりつつある、いわゆる海外帰国子女の問題も、根本問題は日本語が十分にできないなどという点にあるのではなく、日本的型にはまらない者を自分たちの仲間として受け入れないという日本の社会、文化にあると思われる。

参 考 文 献

- 荒木 博之, 1972. 『日本人の行動様式』講談社現代新書。
- 陳 舜臣, 1971. 『日本人と中国人』集英社文庫。
- Chomsky, Noam, 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press.
- クラーク, グレゴリー, 1977. 『日本人・ユニークさの源泉』サイマル出版会。
- Clark, Gregory, 1983. *Understanding the Japanese*, Kinseido.
- Grice, Paul H., 1975. "Logic and Conversation" in Cole, Peter and Jerry L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics* 3, Academic Press.
- Hall, Edward T., 1959. *The Silent Language*, Doubleday. Anchor Books Edition 1973.
- Hall, Edward T., 1976. *Beyond Culture*, Anchor/Doubleday. 岩田, 谷沢『文化を越えて』, 1979. TBSブリタニカ。
- 比喜 正範, 1982. 「日本社会と日本語」『言語』Vol. 11, No. 7. 大修館。
- 本名 信行, 1982. 「文化の違いとコミュニケーション」『言語』Vol. 11, No. 8. 大修館。
- 稲村 博, 1980. 『日本人の海外不適應』NHKブックス。
- 小林 哲也, 1983. 『異文化に育つ子どもたち』有斐閣選書。
- 国広 哲也, 1985. 「言語と文化のタイポロジー」『言語』Vol. 11, No. 8. 大修館。
- 栗本 一男, 1985. 『国際化時代と日本人』NHKブックス。
- ロボ, フェリス, 津田葵, 楠瀬淳三, 1983. 『英語コミュニケーション論』大修館書店。
- Miller, Roy Andrew, 1977. *The Japanese Language in Contemporary Japan*, AEI Hoover Studies 22.
- 直塚 玲子, 1980. 『欧米人が沈黙するとき』大修館書店。
- ネウストプニー, J. V. 1982a. 「わたれる川・わたれぬ川」『言語』Vol. 11, No. 8. 大修館。
- ネウストプニー, 1982b. 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書。
- Reischauer, Edwin O., 1977. *The Japanese*, Harvard Univ. Press. Tuttle

Edition 1978.

Sapir, Edward, 1921. *Language*, Harcourt, Brace and Company.

Sapir, Edward, 1927. "Speech as a Personality Trait," "The Unconscious Patterning of Behavior in Society." in Mandelbaum, David G., (ed.), *Selected Writings of Edward Sapir*, Univ. of California Press, 1963.

鈴木 孝夫, 1973. 『ことばと文化』岩波新書。

鈴木 孝夫, 1975. 『閉ざされた言語, 日本語の世界』新潮選書。

渡辺 キルヨン, 1985. 「異文化理解のために」『言語』Vol.14, No.6.大修館。

Wilkinson, Endymion, 1982. *Misunderstanding*, Revised Edition, Chuokoron-sha.

安井 稔, 1982. 「文化型の露頭」『言語』Vol.11, No.8.大修館。

(筆者 岩手大学人文社会科学部講師)